

2020. 8. 9. 聖霊降臨節第11主日礼拝式説教

ルカによる福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書12章13-21節

『神の前で豊かになる』

群衆の中の一人が、主イエスのもとに来て、兄弟に遺産を分けてくれるよう言ってください、と言ってきました。なぜ主イエスのところにこんな嘆願を持ってきたのか。主イエスほどの人なら何とかしてくれるのではないか、と思ったのでしょうか。しかし言うまでもなくまったくのお門違いです。

「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」二千年前の社会でも、こうした役割は、すでにしっかり定まっていました。当然と言えば当然すぎる主イエスの応答です。けれども主イエスは、このお門違いの話だけをそれだけにしないで、この遺産相続の話から、人々に向かってある大事な話をされました。そして、たとえ話を語ってそのことを伝えようとされました。

最初に主はこういわれます。「どんな貪欲にも注意を払い、用心なさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」話は遺産相続から貪欲へと入っていきました。あらゆる貪欲に注意なさい。人のいのちは財産によってどうすることもできない、という文章は、人のいのちは財産から生じるわけではないからだ、というのが元の意味です。いのちはお金から生じるわけではない、確かにそうなのですが、主はここで何を言おうとされているのでしょうか。

主は一つのたとえ話をされます。ある金持ちの畑が豊作で、倉に納まりきらないほどの収穫があり、どうしようかと思ひめぐらすのです。やがて彼は自分自身に向かってこういうのです。「倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしま」おう。

19節を、新共同訳聖書は「こう自分に言ってやるのだ。『さあこれから先何年も生きていくだけのたくわえができたぞ。一休みして、食べたり飲んだりして楽しめ。』と訳しています。

こう自分に言ってやるのだ、というところは、元の言葉では「そして自分のいのち（魂）に言おう」、という言葉です。自分のいのちに向かって、いのち

よ、とわざわざ呼びかけて、お前のいのちの糧はもう十分あるぞ。さあ、休め、食べ、飲め、楽しめと金持ちは自分のいのちに向かっていったのです。

ところが神はこの金持ちに対して、「愚かな者よ、今夜おまえの命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」と言われたのです。この金持ちのことが愚かな者、と言われていています。何故なのでしょう。何がいったい愚かなのでしょうか。

たくさんの収穫物があったのですから、それをもっと大きな倉にしまおうとすること自体、当然のことです。飢饉も来るかもしれない。備蓄をするというのは現代によりもさらに必要なことだったでしょうから、必要なことだったでしょう。備えあれば憂いなしです。相当な収穫物があったのでしょう。これで何年も食べていける、と思ったのです。

いったいこの金持ちのどこが愚かなのでしょうか。

新共同訳聖書では訳されていませんが、元の文章では、どうしよう私の作物をしまっておく場所がない。そうだ、私の倉を壊して、私の財産をしまい、という具合に私の、私の、ということが繰り返されています。この金持ちはわたしのことしか考えていないエゴイスト、自分のことだけに必死、他者に分け与えとか、貧しい人に与えるというような思いが見られない、だからこの金持ちは愚かなのだ、というふうに読む人がいます。しかし、それは聖書が語っていることでしょうか。

自分の畑の収穫物がたくさん取れたら、自分の倉を大きくして、自分の財産をしまふ、世の中の多くの金持ちはそうしているのではないのでしょうか。それがここで愚かだと言われているとは思えないのです。愚かだ、と言われていることはもっと別のことなのではないか。

この金持ちは、収穫物や財産が豊かになった時に、自分のいのち（魂）に言おうといって、いのちよ、お前のいのちの糧はもう十分あるぞ。さあ、休め、食べ、飲め、楽しめと「いのち」に向かって語っていました。

金持ちが何度も言った「いのち」、それはいきものとしての飢えや渴きを満たし、食べて満ち足りてという、生物的ないのちのことでしょう。人間も他の動物と同じです。食べなければ死んでしまう。しかし同時に、「人の生くるはパンのみに由るにあらず」なのです。パンは必要です。パンがなければ、死んでしまう。しかしパンのみに由るにあらず、なのです。

主は最初に「人のいのちは財産によってどうすることもできない」と言われました。人のいのちは、自分の所有物やお金から生じるわけではない、だれでも知っていることです。食べて維持するいのち、それだけでなく人のいのちは、「与えられるいのち」なのです。

与えられるいのちと言われると、ああ、いのちは授かりもんだ、というふうに受け取る人もいるでしょう。確かにいのちは授かるものです。しかし、人間はやがて自分のいのちも自分のもののように錯覚し、死なないようにはできなくても、お金で、財産で自分のいのちをコントロールできると思ったり、豊かになれば、そのぶんいのちも豊かになると錯覚したりもします。

しかしキリストは、「人のいのちは自分の財産から出てくるものではないのだ」と言われた。それは命というものがどこから生じ、だれから与えられるものか、ということをお伝えしようとする言葉なのです。

主イエスは、十字架にかかり、復活なさせて、復活のいのちをわたしたちに与えてくださる方です。その主イエスご自身が永遠の命に生きる方として、わたしたちと交わる方です。すなわち、わたしたちは主イエスとの交わりの中で、神からのいのち、新しいいのち、復活のいのち、永遠の命を与えられていくものなのです。

「与えられるいのち」という場合、いのちを与えてくださる方がいるのだ、ということを知ることが必要です。

金持ちは自分の所有物や財産が増えることで、別に死ななくなるとは思わなかったでしょう。しかし財産が増えることで、いのちが豊かになり、安心し、満たされると思った。けれども、そのいのちは今夜取り上げられる、ということです。極端なたとえ話です。しかし、人間のいのちは一瞬にして亡くなりもし、消え失せる。けれど、キリストは死によっても奪われることのないいのちの豊かさを知らないことは愚かだ、と語っているのです。

このたとえ話は、まるで日本の戦後の高度経済成長を物語るようなたとえだ、と言った人がいました。わたしたちの歩みととても無縁とも思えないのです。確かにわたしたちはお金持ちではないかもしれないけれど、財産が増えることで、お金が増えることで、いのちが満たされていくような錯覚は、だれもが知るものでしょう。しかし、自分の所有物を増やすことで満たされていくものとは全く質的に違う、与えられるいのちがあることを、主は語ろうとしてお

られる。

いのちを与えてくださる方がいる。人はたんに、生物的に生きているだけでなく、与えられるいのちを受けて生きる者である。キリストはそのことをこのたとえ話で語ろうとしておられます。人は所有ということにある意味で取りつかれていきます。自分の持ち物は自分を大きく見せ、たくさんの持ち物はあたかも自分が豊かなものであるかのように錯覚させます。だからこそ人は食欲にもなっていくのです。

しかし主は所有ではないいのち、与えられるいのちの真の豊かさを、真の充満をわたしたちに示し、与えるために来てくださった方です。

わたしたちは洗礼によって、キリストにつながる新しいいのちへと招かれました。そしてキリストの復活のいのちを与えられてきています。肉体の死を越えて、キリストと、神とつながるいのちの中にあります。すべては与えられるいのちです。

遺産相続の話から、話につながってきました。所有への執着は根の浅いものではない。しかし、わたしたちは「持つこと」ばかりに目を奪われるのではなく、「与えられるもの」目を向け、与えてくださる方に目を向け、その与えられるものを受けて、豊かなものとされていきたいのです。